

# 地球温暖化による沿岸漁場環境への影響評価・ 適応策検討調査委託事業（概要）

漁業資源課 山本 順

## 1 目的

水温自動観測ブイを用いたリアルタイム沿岸漁場環境モニタリングを実施し、地球温暖化の傾向を捉えるとともに、地球温暖化が沿岸環境に及ぼす影響の実態を把握し、評価する手法を開発することを目的とする。本事業の平成 21 年度報告書で詳細を報告したので、ここでは概要を記述する。

## 2 事業の概要

昨年度の宿毛湾のブイに加え、本年度には 11 月 18 日に椎名大敷組合の 3 号定置網の近傍に水温自動観測ブイを設置した。設置場所の水深は 45m である。1、5、10、20、30m の 5 層の水温が 10 分ごとに測定される。これらのデータは 2 時間ごとに送信され、以下のサイトで閲覧できる。

パソコンでのアクセス <http://buoy.nrifs.affrc.go.jp/>

携帯電話でのアクセス <http://buoy.nrifs.affrc.go.jp/k/>

また、黒潮系暖水の波及状況を把握するために、記録式水温計を宿毛湾内外の定置網（3ヶ所）に設置した。さらに、地球温暖化の影響を評価するための基礎資料とするために、既往の知見やこれまでの様々な調査によって得られてきた情報を収集、整理するとともに、藻場分布調査などを実施した。

## 3 結果

宿毛市藻津地先における藻場分布調査の結果から、本県ではこれまで見られていなかったマジリモク、シマウラモク、キレバモクといった亜熱帯性ホンダワラ類の生育が確認された。さらに、それら亜熱帯性種が、在来種のイソモク、マメタワラといった温帯性ホンダワラ類と混生群落を形成していることが確認され、南方種の北上が示唆された。

椎名大敷組合のブリの漁獲動向を調べた。ブリ銘柄の漁獲尾数は、1970 年代後半から 1980 年代前半にかけての低レベルから脱し、近年は比較的安定して推移しているのに対し、メジロ銘柄は 1980 年代後半以降徐々に増加し、特に最近の増加が顕著であることが明らかとなった。この漁獲尾数の動向は土佐湾の表面水温の動向とおおむね一致していた。